

今日の聖書の箇所、11節から15節には、ティアティラの市の紫布の商人リディアという女性が出てきます。ティアティラで紫布の商人をしていたリディアは、裕福な女性実業家でした。このティアティラは現在のトルコにある町で、紫布の染め物で有名でした。そのティアティラから400kmほど離れたところにフィリピという町がありました。このフィリピに祈りの場所があり、パウロとシラスはそこへ伝道に出かけて行きます。ユダヤ人が集会所としていたシナゴグと呼ばれるユダヤ教の会堂がありますが、この祈りの場所というのはシナゴグになる前のユダヤ教の小さな集まりと考えられます。その祈りの場所で定期的に祈り会や礼拝が持たれていたのでしょう、リディアはその集会に集い、熱心に神をあがめていました。異邦人の女性で裕福なリディアがユダヤ教の祈りの場所に通っていた。この当時、異邦人の裕福な女性がユダヤ教の集会に集うということはたいへんな出来事でした。

エルサレムにあった伝統的なユダヤ教のシナゴグでは、異邦人女性と一緒に礼拝するなどということはとうてい考えられませんでした。しかしフィリピの祈り場には、異邦人の女性が自由に出入りをしていました。この祈り場に出席する女性たちは、古い伝統や習慣にとらわれない自由な信仰の持ち主でした。裕福な暮らし、満たされた生活の中で、信仰を求めて生きることはとても困難なことです。

今から10数年前の話になりますが、私が連盟の国外伝道室長をしていたとき、タイのバンコクでバプテストの教会の青年と話をする機会がありました。その時に彼はこんな話をしてくれました。ちょうどそのころ、タイのバンコクは急速な発展を遂げていた町で、高層ビルが立ち並び、お金さえあれば何でも手に入る町になっていました。そんな町の様子を見て、タイのバプテスト教会の青年はこう言いました。「町が発展して、何でも簡単に手に入るようになったら、人々は宗教から離れてしまう。今、バンコクではそんなことが起こっている」。タイは熱心な仏教国でクリスチアンの人口はとても少ないのですが、宗教に対する熱心さは日本とは比べ物になりません。そのタイでもお金の力によって宗教離れが進んでいるというのです。イエス様も、富についてこう言われました。「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」。このように、富んでいる人が信仰を持つことはとても困難なことなのですが、しかしリディアは裕福な異邦人の女性でありながら、熱心に神を求めてユダヤ教の集会に集う自由な魂の持ち主でした。そのようなリディアでしたから、ユダヤ教の祈りの場所に伝道にきたパウロとシラスの語る言葉に耳を傾け、イエスを主と信じ、バプテスマを受けることができたのです。

16節からの箇所では、そのリディアとは対照的な女性が出てきます。占いの霊に取りつかれた女奴隷です。彼女は二重の意味で不自由な女性でした。彼女は占いの霊に取りつかれていた上に、その稼ぎを主人たちに巻き上げられている女奴隷でもありました。彼女は悪霊に取りつかれていました。今で言う、心の病、精神的な病を抱えていたのでしょう。肉体的にも精神的にも奴隷にされていたこのあわれな犠牲者は、パウロたちを占いのだしにでも使おうとしていたのでしょう、二人の後を追いかけては「この人たちは、いと高き神の僕たちで、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです」と叫んでいました。そこでパウロは、彼女にとって最善のことを行います。「イエス・キリストの名によって命じる。

この女から出て行け」。すると、悪霊はこの女性から立ち去りました。彼女は占いの霊から解放され、もう占いの奴隷にはならないですむのです。ところが、その出来事を喜ばない町の人たちがいました。悪霊に縛られて奴隷になっている人、苦しめられている人が解放されたにもかかわらず、そのことが他の人たちの喜びになっていかない。イエス様の時もそうでした。イエス様が悪霊を追い出すと、その村の人たちは決まってイエスに村から出て行ってくれと言うのです。実は、このような思いこそが私たちの心の奥底に潜む深い罪の根なのです。これは二千年前のイスラエルの話ではなく、今の私たちの現実の話です。私たち日本の国にもこんなことがありました。いわゆるライ病と呼ばれていたハンセン氏病患者さんたちが、彼らを隔離し彼らに非人間的な生活を強いた国に対して裁判を起こそうとしていたときのことです。患者さんたちがある商店街で裁判の訴えのためのチラシを配っていると、その店の人が出てきて、「あなたたちがそこでチラシを配っていると、お客さんが来なくなるから、よそに行ってやってくれ」と言われたそうです。非人間的な生活を強いられ、不自由な中から人間としての尊厳を取り戻すための訴えをしている最中に、町の人たちは彼らを邪魔者扱いする。彼らが勝ち取ろうとしている自由と解放には何の興味も示さない。いやむしろ、迷惑にさえ感じている。そしてこの話を聞いている私たち自身も、こうして話として聞いている分には、何とひどいことをするのだと憤りを感じても、実際に自分がその場に遭遇したときには、私に迷惑をかけないでくれと思う、そんな人たちがいます。私たちの心の闇には、自分さえ良ければという測り知れない自己本位な罪があることを覚えておきたいものです。

今日の聖書の箇所に出てくるこの女奴隷の主人たちも、そうでした。彼女が占いの霊から解放され、正気に戻ったことに対して主人たちは何の関心も示しませんでした。彼らはただ、商売道具としての女奴隷が使いなくなったことに対して訴え出るのです。彼らがこれまでこの女奴隷にしてきたことなどおかまいなしに、自分たちは迷惑をこうむった、このユダヤ人たちをつかまえろ、と言ってパウロとシラスを役人に引き渡すのです。この女奴隷の主人たちは、彼女が解放されたことを一緒に喜ぶことができませんでした。彼らも、人の喜びと一緒に喜ぶことができない、とても不自由な生き方をしている人だったのです。

さて、パウロとシラスは女奴隷の主人たちの訴えによって役人に引き渡され、衣服をはぎとられ、何度も鞭で打たれ、足枷をはめられて、いちばん奥の牢に入れられてしまいました。パウロとシラスは文字どおり、肉体の自由を奪われてしまいました。鞭打ちの傷は肉体と精神に苦痛を与え、立っていることさえ困難な状況に彼らを追い込みました。その上、足にはしっかりと足枷がはめられ、狭い牢獄の中でさえ、自由に動きまわることができないような状況に追い込まれてしまいました。占いの霊に取りつかれ、商売道具としてこき使われていた女奴隷を、悪霊から解放し自由を与えたパウロとシラスは、彼女を自由にしたことによって、今度はこの二人が、肉体を拘束されたのです。この町の人たちは、女奴隷が悪霊から解放されたことを自分の喜びとすることができませんでした。このあと残された時間で、共に喜ぶということの難しさについて一緒に考えてみたいと思います。

ヨハネによる福音書9章に、目の見えない人がイエス様によっていやされる出来事が記されています。もう何度も取り上げている箇所ですが、イエス様の弟子たちが生まれつき目の見えない人を見かけてイエス様に尋ねます。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」。イエス様

の弟子たちでさえ、生まれつき目が見えないことがその人や両親の内にある罪のせいだと思い込んでいたことに対し、イエス様はこう言われます。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」。このように、イエス様は生まれつき目が見えないのは、その人やその両親の罪のせいではなく、そうやって目が見えないことの原因を過去に求めて納得したような気になるのではなく、今彼の目が見えないというその現実から出発して、彼の将来の上に神様の御業が現れるようにこれから先のことに目を向けていくことが大切なのだと教えてくださいました。このことについては今日は触れる時間ありませんので、またいつか取り上げたいと思いますが、そうやってイエス様が目の見えない彼をいやされ彼の目が見えるようになると、人々はそのことを一緒に喜ぶのではなく、いぶかしがります。民衆に律法を説いていたファリサイ派の人々は、彼の目がいやされたのが安息日であったことをとらえ、律法違反になると言って、目が見えるようになったその人を問い詰めるのです。安息日には、不要不急の医療行為や治療行為は禁止されていたからです。といっても、彼の目がいやされることが不要不急であるというのは、目が見える他の人たちが勝手に決めたことなのですが、そのようにして目が見えるようになったその人はファリサイ派の人々のところへ連れていかれ、尋問を受けます。「どうしてあなたの目が見えるようになったのか」。彼はその問いに対し、自分の身の上に起こった出来事をすべて正直に話します。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと見えるようになったのです」。そこにいたファリサイ派の人々は、その出来事を信じることができずに、さまざまに議論を重ねます。彼の両親でさえも、ファリサイ派の人々を恐れたのか、本人に聞いてくれと言って自分たちに責任が及ぶのを避けようとします。するとファリサイ派の人々は、何度も彼に同じことを問い正すのです。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか」。そこにいた人たちの中で、彼の目が癒されたことを一緒に喜んでくれる人は誰一人としていませんでした。彼は人々から責められ、とうとう追い出されてしまいます。その後、9章35節以下で、その人はイエス様ともう一度出会います。イエス様が、彼に向かってこう尋ねます。「あなたは人の子を信じるか」。彼は答えます。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが」。すると、イエス様はこう答えられます。「あなたは、その人をもう見ている。あなたと話しているのが、その人だ」。そこで彼はひざまずいて「主よ、信じます」と答えました。彼は、見えなかった目を癒されただけではなく、自分の目が見えるようにしてくださった方、神の元から来られたキリストと出会ったのです。すると、イエス様はこう言われました。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」。

目が見えなかった人がいやされた。その事実を認めることなく、またその人の身の上に起こったうれしい出来事を共に喜ぶことなく、ファリサイ派の人々は驚き怪しみ、彼の上に起こった出来事を受け入れることができませんでした。ファリサイ派の人々は、彼の上に起こった神の業を見ることができなかった。大切なものを見失ってしまっていたのです。

今日の聖書の箇所においても、占いの霊に取りつかれていた女性を悪霊から解放したパウロとシラスの働きは、女性の主人たちを怒らせ、パウロとシラスは足枷をはめられ牢に入れられてしまいます。主人たちやまわりにいた人たちは、悪霊に取りつかれた女性がいやされ解放されたことを、誰も共に喜ぶことができませんでした。

ローマの信徒への手紙 12 章 15 節には、パウロのたいへん有名な言葉が記されています。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」。この言葉を聞くたびに思うことがあります。それは、私たちは泣く人と共に泣くことはできても、喜ぶ人と共に喜ぶことは本当に困難なことだということです。人の悲しみを共に悲しむことはできても、人の喜びを共に喜ぶことの難しさを、聖書ではいたるところで語っています。私たちも、人の喜びを共に喜ぶことのできる者となっていきたいと思います。

さて、このようにしていわれのない出来事で投獄されたパウロとシラスですが、この後、二人がどうなっていくのかは、来週の礼拝で一緒に学びたいと思います。

お祈りしましょう。